

# 新島 襄のキリスト論

## ～「キリストの真理の証し」と復活論を中心として～

大 越 哲 仁

### はじめに

新島の神学思想について、本誌前号の拙論（「新島襄の神学思想」）において私は、新島は恩師シーラーに倣い、キリスト教だけが「天啓教」（「天啓ノ宗教」）すなわち天の啓示による宗教であり、神から始まり人間に近づく「真理ナル」宗教であって、他の「人為ノ宗教」すなわち人間から始まり人間から神を求める「真理ニ類スル」宗教とは異質のものであるとの思想を抱いていたことを明らかにした。そして新島は、キリスト教の本質は神の完全な愛であり、それはキリストを通して初めて人間が理解できるようになったものであると論じ、キリストの十字架は、地の人間を救済するために天の神が下ろした綱、築いた道、架けた橋である、と例えたことを指摘し、あわせて彼が、理性と信仰、宗教と自然科学は決して矛盾しないものと考え、自然科学の領域を超えたところに神を位置づけ、自然科学と補完関係にある神学を思索していたことを論じた。

しかし、当該拙論は新島神学において、いわば序論、伝統的な神学の区分で言えば神論・創造論に関する概説というべきものである。そこで今回は、キリスト教信仰の中心におられるイエス・キリストに関する新島の思想、具体的には、イエス・キリストは誰であるか、という新島の神学的な理解を論じて、新島神学を更に探求してゆきたい。

なお、キリスト論には、キリストはだれか、という議論とともに、キリストの意義、特に人類にとっての意義という神学的な意味と同時に、新島自身にとっての意義という実存的な意味を論じる必要があるが、誌面の関係で、これは別稿で論じたい。

## イエス・キリスト論の課題

オックスフォード大学で神学を教えるアリストアー・E. マクグラス教授は、神学の入門者向けの著書『神学のよろこび』において、「イエスは誰か」との設問に対する、メシア（キリスト、神によって指名されたイスラエルの王）、主、神の子、人の子、神、人間の救い主（救済者）という新約聖書におけるイエスのさまざまな呼び方を解説した後、それらもろもろの「キリスト論的称号」は「全体を織りなす一つの絵」を作り上げているものの、「たった一つの称号だけでこの〔イエスの〕全体像を的確に表すことはできません。これらの称号が集められて初めて、神である救済者、主なるキリストの、豊かで深い説得力ある肖像画が構築されます。まさにそのような方としてイエスは、罪深い死すべき人間に計り知れない影響力を与え続け、また訴えかけているのです」と述べる<sup>1)</sup>。

新島もまたイエスを主<sup>2)</sup>、神ノ子<sup>3)</sup>、宇宙の主<sup>4)</sup>、宇宙の造主<sup>5)</sup>、精霊のみ子<sup>6)</sup>、救い主<sup>7)</sup>、など様々な「キリスト論的称号」で言い表しながら、「是迄予モ屢基督ノ言行ヲ題トナシ説教モ為シタレトモ、今日基督ノ御自身ニ付其ノ億万分ノ一ヲモ伺ヒ見ントスレハ、実ニ予ノ心ノクモリ目ノ鈍クシテ、見テ見ヘス、思テ了知シ得サラン事ヲ恐ル」、今まで何度もキリストの言行について説教をしてきたが、キリスト御自身について、その数億数万分の一だけでも推測しようとしても、自分の心は曇り目は鈍いために、見ようとしても見えず、思っても了知することができていないことを心配する（それほどキリストは計り知れないほど巨大な存在だ）と語っている<sup>8)</sup>。

このように、新島のキリスト論を論じる際、新島自身がキリストを何か一つの固定的な枠に収め、断定的な定義で断言する立場を取っていないことに注意する必要がある。実際に新島は、既述のとおり、折に触れて様々な「キリスト論的称号」でイエスの広大な全体像の中の一面を述べているのである。

いったい、有限な人間が、人間を越えた主、宇宙の創造主の全容を知る

ことが出来るのであろうか？

「天才」と讃えられる現代の宇宙物理学者、スティーブン・W. ホーキングは、ベストセラーとなった『ホーキング、宇宙を語る』において、宇宙は特異点や境界のない有限な四次元空間である、との自己の仮説を述べた後、やがてわれわれは宇宙に関する完全な理論を発見するであろう、そのとき、われわれすべてが、われわれと宇宙が存在しているのはなぜか、という議論に参加ができ、そしてその答えが見出せれば、われわれは「神の心」を知ることができる、それは「人間の理性の究極的な勝利」の瞬間だ、と断言するが<sup>9)</sup>、新島はこのような立場は取っていない。それは、彼が「基督教ノ神ハ道理上ノカノ及ハ〔ザ〕ル神」<sup>10)</sup>であると断じたとおりであり、また彼の自然科学者の側面の衣鉢を継いだ工学博士の下村孝太郎が「人間は三延以上の延を有する空門〔四次元以上の時空〕を想像し得ず」<sup>11)</sup>と指摘し、人知は有限であって「現代科学の如き勝ち誇りたる諸学問は、総合大宇宙の微小部分に過ぎずと考ふるに至るべし」<sup>12)</sup>と軌を一にするものである。

さて、新島は、キリストの巨大さと自己の不明に触れた上記の言葉に続けて「乍去基督ノ宝血ヲ以テ贖レタル吾人、此ノ基督ニ付キ十字架ノ下ニ臥シ基督ヲ伺ヒ見ルハ、必ラス基督ノ許シ賜フ事ト信シ、又基督ヲ伺ヒ見テ〔兄弟と〕御同様ニ心ニ得ル所アラント思ヒマス」と述べる<sup>13)</sup>。自分はキリストの血によって贖われた者であるから、キリストのことを推測して語ることをキリストは許して下さる、と新島は述べるのである。

しかし、「〔イエスの時代より〕千八百八十有三年ノ時代ヲ異ニシ、猶太国ヨリ数千里ノ陸海ヲ隔ツル日本ノ旧帝都ナル京都」<sup>14)</sup>において、いったい我々は、どうやってキリストのことを知ることが出来るのであろうか？

我々はガリラヤからイエスに随従した使徒のようにイエスを間近に見て、イエスの声を間近に聞いてイエスに直接触れることはできないが、「幸ニ新約聖典ノ存スルアリ、之ヲ読ミ之ヲ信スルモノハ其ノ声ヲ聞クヘク、其ノ榮ヲ見ヘク、又或ハ此書ヲフセ、目ヲトジ心ノ中ニ基督ノ声ヲ聞キ得ヘク、又其ノ榮ヲ見ベシ」<sup>15)</sup>、「吾人各信仰ノ目ヲ以基督ヲ見、信仰ノ耳ヲ

以テ基督ヲ聞ウル」<sup>16)</sup>、現代の京都においても我々は新約聖書と信仰の目、信仰の耳でイエスを知ることはできる、と新島は語る。

アメリカで当時の日本人の誰よりも深く神学を学んだ新島だが、イエスを知るには、そのような学問としての神学以上に、まずもって新約聖書と信仰によることを彼は主張するのである。

新島がこのような立場に立ってイエスを捉えていることを確認した上で、これから新島のキリスト論を確認してゆきたい。

## 新島によるキリスト伝

今まであまり指摘されていないが、新島の説教の中にイエス・キリストの生涯とその意義を包括的に述べたものがある<sup>17)</sup>。それは、ヨハネによる福音書第18章37節をモチーフにし、聖書の記述をゆたかに盛り込んで構成された長文のものだが、新島のキリスト観の全体像が分かるものなので、現代文に拙訳し、解説を加えながら、その全文を読み解きたい。

ヨハネによる福音書18章37節

〔そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く<sup>18)</sup>」〕

イントロダクション

救いの道

人に神とキリストを信じさせることができれば、神に人をお救い頂くことができる。

○キリストは真理の証しを行い、真理の国を世に起こした  
真理の解明

1. キリストは真理の証しを立て、死によってそれを証明した

ああ、天を主宰する神、この世を心にかけて下さり、この罪惡の世を真理の世と為さるために、1880年前、ご自身がおつくりになったユダヤの国にこの世の救い主を誕生させ、彼によって神の真理をこの世に顕し、死んだ世をまた生きる世に変えさせ、燃け滅びた灰をまた燃えさせたもうたのは、〔人間にとって〕なんという幸福であろうか。

キリストの幼児の頃の事は少しばかり福音書に記載されているが、エジプトより帰って後三十歳に至るまでのことは、ただ十二歳のとき、父母と共にエルサレムに至った事だけ〔が記載されている〕である。彼はその時から、もはや当然父〔である神〕の仕事を勤めるべきであることを知らないのですか、と母にお答えになって、すでにこの時以来父の仕事をされていた<sup>19)</sup>。すなわち真理の証しをすることに留意されていたことは明らかである。○三十歳の後、ヨハネに就いて受洗した時、ヨハネは彼を指して神の子羊と言われたのは<sup>20)</sup>、全くキリストは世の救い主であることを証したことであって、この時よりキリストは神の真理をこの世に証明し、人を此の〔世の〕罪惡から逃せさせて、ご自身自ら人の為に贖罪の道を開かれようと計られた。〔キリストは〕最初、弟子を招くのに「来なさい。そうすれば分かる<sup>21)</sup>」とおっしゃられ、又「あなたを人間をとる漁師にしよう<sup>22)</sup>」とおっしゃり、ガリラヤにおいてこの真理の証を為し始められ、真理の証しを証明するためにしばしば奇跡を行い、親切丁寧にこの世で助け〔保護者〕のない人間を導き賜わったのである。

この新島によるキリスト伝は、冒頭でヨハネによる福音書の「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」という聖句を掲げ、イントロダクションで「真理の証し」、「真理の解明」というテーマを示し、イエス・キリストは、世に真理を示し、その真理の証しを行って、人を罪惡から救い出すために生涯を尽くされたことを論じるものである。キリストの奇跡もまた、その真理を証明するために行われたと新島は捉える。

それでは、その真理とは何か？

これについては、新島のキリスト伝を読み終えてから検討したい。

さて、キリストについて驚くべきことは、〔神の〕仕事を務める前に彼は決して学んだこともなく、師に就いたこともなく、他の悪風にも感化せられず、また、密かにナザレ村にあって普通の人と同様に成長され、常に家において孝行を尽くし、〔神の〕事を始めるにおいて、その弟子は多く漁師で、その友とするところは〔人が蔑む〕収税人や罪人。その癒す人は不具者、盲目の人、百人隊長の息子<sup>23)</sup>、元しもべ、〔異邦人である〕シリア・フェニキアの婦人の娘<sup>24)</sup>。その説く相手は、多くは貧しい人、そしてまたエルサレムの学者とは異なり、サマリヤの一婦人。その滞在する所は、エルサレムからガリラヤ地方と「ペリヤ」<sup>25)</sup>。かつて〔キリストが〕ユダヤの地におられた時、キリストはヨハネよりも多くの弟子をつくった、とファリサイ派<sup>26)</sup>の人々の耳に入ったことをお聞きになるやいなや、キリストはその地を去り、ガリラヤに行かれたのである<sup>27)</sup>。

○ガリラヤ湖の北におられた時、群集が彼を迎えて〔イスラエルの〕王にしようとした時は、イエスはこれを避けて山に隠れられたのである<sup>28)</sup>。○また、イエスの兄弟が、イエスに勧めて、エルサレムに行って自分の働きを衆人に示すべきだ、と言ったのに対して「私の時はまだ来ていないから、私は行かない」といってその勧めをお断りになった<sup>29)</sup>。善事を一つ行う毎に、相手を戒めて他人に告げてはならない、と言われては、決して自分の名を売る工夫をなされず、あるいは、上等社会のファリサイ派の人々から尊敬を得る考えも為さらず、彼らに対しては、「ファリサイ派の人々は不幸だ」と仰せられた<sup>30)</sup>。○多くの金持ちにへつらって金力を求めることを意味のないこととして、金持ちに向かつては、富める者が天国に入るのは、らくだが針の穴を通るよりも難しい<sup>31)</sup>、と言われ、ヘロデ王については、「行って、あの狐〔ヘロデ王〕に告げよ」と言われ<sup>32)</sup>、祭司の長に向かつては「白く塗った壁よ」と言われ<sup>33)</sup>、このように〔率直で〕権謀も用いられず、さら

に兵力を求めず、その着目することは、ひたすら真理の国を立てることによって、真理によって我等を悪魔の手から逃せさせて自由の民、天国の民にさせるために迫害も気にせず、威武にも屈せず、千辛万苦ご自身は足を容れる地もなく枕する所もなく<sup>34)</sup>、あるときは山中に臥し、あるときは舟に寝て三年有余、あるときはガリラヤにあり、ある時はヨルダンの東にあり、あるときはユダヤ地方にあり、あるときはエルサレムにあり〔このように移動しながら活動していった〕。イエスの為さったこと、その行われたこと、その教えられたことは、すべて真理でないものではなく愛でないものはない。それはことごとく、人をして神を信じるように、またキリストを信じるようにさせて、そうすることで神をして人をお救い頂こうとする以外に目的は無く、罪惡の世をなんとかして真理の世にさせようとされたことはキリストの大目的なのである。

新島は、このように、自らの栄典を一切求めず、かえって、権勢を誇りつつ欺瞞に満ちた者を強く批判し、ひたすら民に真理と愛を示して神による救済を願い、罪惡に染まりきったこの世を真理の世に変えることを目的として、枕する所もなく苦勞に苦勞を重ねながら福音を説いて歩くイエスの姿を描写する。

神がお定めになった時に至れば、あえてそれを避けることも為されず、彼を捕えるために士卒が〔ゲッセマネの〕園に来たときに「誰をさがしているのか、予はナザレのイエスである」とおっしゃられた<sup>35)</sup>。

世において人の前では偽りを飾り嘘を言い、ねたみを抱き、政府におもねり、人望や名利を求めるなどを行った卑劣なファリサイ派の人々。そして、一定の主義も無く嘘八百によってキリストには罪が無いことを知りながら彼を救う手段もなく、罪のない義人であるキリストをユダヤ人に渡して十字架に架けさせたのは、いったい誰の所業なのか。これは、ローマ政府を代表して一国を治める義務を担っていた者〔ピラトのこと〕ではないのか。〔キリストは〕四方ことごとく偽り

の人物の中であって孤高を保ち、「私の国は、この世には属していない。私は真理について証しをするためにこの世に生まれた」とおっしゃった<sup>36)</sup>。

〔キリストは〕ご自身に罪がないことを取り立てて証言せず、また、ピラトの質問に一々答えず、ただ「私はあなたが言うごとく真理の王である」とおっしゃられ<sup>37)</sup>、ご自身について弁明もなされずに泰然として死に赴くことも拒否なされなかった。

ここで、新島が彼のキリスト伝のモチーフとしたヨハネによる福音書（ヨハネ伝、以下同じ）の18章37節の言葉が引用される。

そこにある真理（truth）という言葉が数多く登場するのはヨハネ伝の特徴である。真理という言葉は、マタイ伝とマルコ伝、ルカ伝では1回だけ、いずれも、イエスの弟子たちが、イエスに向かって、イエスは真理に基づいて神の道を教える方だ、と述べるほぼ同一の内容におけるものが<sup>38)</sup>、ヨハネ伝では19回も登場し、それも多くの、ヨハネ伝の作者やイエスの言葉として記述されているのである<sup>39)</sup>。

真理という言葉は、この後も新島のイエス伝に登場し、既述の通り、この新島のキリスト伝全体のモチーフとなっている。

なお、脚注において新島のキリスト伝に現れる事蹟の出典を明記したとおり、新島は特にヨハネ伝の記述を多く引用している。それは、窮理を好む理系の人間であるために彼がヨハネ伝で説かれる「真理」という言葉に惹かれたとも考えられるが、それ以上に、プロテスタントの先覚者ルターが、ヨハネ伝こそ新約聖書の中で第一の福音書と指摘していたからであろうと私は考える<sup>40)</sup>。

### 棘の冠と愚弄

十字架さえもまったく〔イエスの〕志を動かすことができない。〔イエスは〕十字架に血を流して公然として世に向かって真理を証明したことを明らかにしたのである。

フランスの有名な民権家のルソーは、元来キリストを信じないのだ

が、〔その彼が〕ソクラテスとキリストを比較して、ソクラテスは豪傑の如く死に、キリストは神の如く死んだと言ったというのである。

## 2. キリストは真理の証しを立て、死して後、見事に世に勝利したことを知ることができる

キリストが生前にしばしば弟子に打ち明けて「私は罪人の手に渡され殺されて三日目に復活することになっている」と言われた<sup>41)</sup>。そしてまた「今私が行くのだ、と言ってから、弟子たちに憂いが満ちている、だけれども、わたしはまた来ることになっている、その時あなたがたは喜ぶはずだ、そして、あなたがたの喜びは誰も奪うことができない<sup>42)</sup>」と言われ、「わたしが地上から上げられたならば、万民を自分のもとに引き寄せよう<sup>43)</sup>」○「私は既に世に勝っている<sup>44)</sup>」などとおっしゃった。

さて、ソクラテスが死すとき、このような言葉を吐いたであろうか。

孔子が死ぬ前に、どんな言葉を吐いたか。「鳳鳥不至、河図ヲ出サズ、吾止〔ヤン〕ヌルカナ（鳳凰、そして黄河から出てくるという八卦の図などの瑞兆は現れない。今となっては仕方がない、もう終わりだ<sup>45)</sup>）」という〔絶望の〕言葉を述べたではないか。

豊太閤〔秀吉〕が死すとき、「わたしは世に勝っている」言われたか。「露と置き露と消えぬる我身かな、難波の事は夢の世の中<sup>46)</sup>」と言ったのではないか。

一寸先は暗黒世界、それなのにキリストは生前に右のような言葉を述べて弟子を慰めたことから、この言葉だけを聞く者ならば、嘘や権謀であろうと言うことができようとも、キリストの死後の歴史を読めば、いかなる事件が出来たのか〔イエスの言葉が嘘でなかったことが分かる〕。ユダヤ人の兵士に命じて、キリストの墓を封じて番兵を置いた<sup>47)</sup>。〔それなのに、キリストは〕三日目になって、墓の中に居られず、復活して墓をお去りになった。〔そして〕しばしば弟子に現れ、〔弟子の一人の〕トマスがいない時に現れ、また、トマスがいる時に

〔イエスが十字架刑で受けた傷のある〕手を見、わき腹を見よ、とおっしゃられた<sup>48)</sup>。

ピラトはいったい何を為し得たのか。ユダヤ人はいったい何を為し得たのか。キリストは彼らに負けて、そうして勝ち、死してそうして生きたのである。

これは、復活によってキリストが真理を証しし、真理は神の真理であって、ピラトもユダヤ人も兵士もどうすることもできず、世の人はこれに勝つことができないことを証明したのである。

「大工が捨てた石が、家の角の親石〔コーナーストーン、家を支える定礎石〕になったことは人の目に驚くべきことである〔人間が殺したキリストが、人間を死から救う家の土台になったことは驚くべきことである〕」

新島は、イエスが生前に自分の復活を予告したこと自体、他の偉人の誰もが行えなかったことであり、それが嘘ではなく本当であったことをキリストは自らの復活を通して示された、それこそが真理の証しの証明であり、その真理は神の真理であって、世の人は誰もこれに勝つことができない、だれもがこれに従わなければならない、と確信をもって述べる。

### 3. キリストは真理の証しを立てて人間の心を感動させ、人間をキリストの志に続くよう動かした

「真理を好む者は私に属す」とキリストは述べられた<sup>49)</sup>。

この真理とは人の心にふさわしいものである。人の心にふさわしい理由は、キリストの愛が真理の中にあるからである。愛は真理の基礎なのである。

ヨハネの手紙二（3節）には「父である神と、その父の御子イエス・キリストからの恵みと憐れみと平和は、真理と愛のうちにわたしたちと共にあります」とある。このようにイエスは、真理の正しさを証明して人々を

感動させ、彼に続く者とさせた。なぜ、人がイエスの教えに従い、イエスに続くようになったのかといえば、この真理は、神とその御子イエス・キリストが人間を愛し、人間を救うためにこそ証したものであるから、人の心に感動を与えるからである。こう新島は結論付けて、自身のイエス伝を終える。

以上の新島のキリスト伝の表題と章立てを改めて下に示そう。

### 救いの道

人に神とキリストを信じさせることができれば、神に人を救っていただくことができる

○キリストは真理の証しを行い、真理の国を世に起こした

1. キリストは真理の証しを立て、死によってそれを証明した
2. キリストは真理の証しを立て、死して後、見事に世に勝利したことを知ることができる
3. キリストは真理の証しを立てて人間の心を感動させ、人間をキリストの志に続くよう動かした

新島は、このキリスト伝を通して、イエスの全生涯が真理の証しを明らかにするためのものであり、そして、磔刑死によって生涯が閉じられた後の復活こそが、神の真理の証明そのものであり、その復活によって、キリストの愛と真理が人々に伝わり、キリストの後に続く人を生んだ、と主張する。

このように、新島のキリスト伝は、イエスの磔刑による死で終わるものではない。いや、イエスの死はあくまで過程であって、死の後のキリストの復活こそがもっとも意義あるものである。その意味で、新島のそれは、「史的イエス」や「人間イエス」を語るイエス伝ではない。復活によって真理が絶対的に正しかったこと、真理が真理そのものであったことを証明した救い主キリストに関する伝記であり、キリスト伝そのものなのである。

それでは、その真理、そして真理の証しとは何か。

## 新島におけるキリストの真理

定評あるHornbyの英英辞書<sup>50)</sup>によれば、真理 (truth) とは、1) the quality of being according to fact ; agreement with fact / 2) that which is true; that which is according to fact / 3) a principle that is generally regarded as true ; a generally accepted fact, の意味があり、科学や宗教における真理とは、このうちの3)の意味を指すことを述べている。“広く事実と認められ、受け入れられている原理・法則”という意味である。一方、聖書における真理は、聖書の解説書によれば、「実証されうるもの、そして信頼に値するもの」であって「堅固なものであり決して変化しない」ものを指す<sup>51)</sup>。さらに、新島の同僚で聖書の各文書に関して膨大な註釈書を書き残したラーネッドは、上記の新島のキリスト伝のモチーフとなっているヨハネ伝18章37節、「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た」というイエスの言葉について、「真理(まこと)と云ふは『道』と云ふと同しで、勿論一般の学識ではなく、高尚なる真理、即ち神及び来世に関する真理である。『真理に就て證(あかし)を為(なさ)んため也』と云ふは、救道(すくひのみち)を教へんが為なりと余り違はぬのである」と解説し、さらに「生まれ、そのためにこの世に来た」とは「イエスは一般の人とは違つて、定つたる目的を以てこの世に生まれ給ふたと云ふ事は、明白なる事である」と解説している<sup>52)</sup>。

さて、新島は、先のキリスト伝における真理と真理の証の意味について直接それを説明している文章を残していない。しかし、このヨハネ伝18章37節のイエスの言葉に従ってキリストの目的を論じた文章(〔キリストノ目的〕を著しており<sup>53)</sup>、上述のような真理の定義やラーネッドの解説(「真理の証しを立てるとは救いの道を教えること)を踏まえると、その文章に述べられたキリストの目的が、キリストにおける真理の証しと同じ意味を持つものと捉えてよいといえるであろう。

そこで、その文章で述べられたキリストの目的を次に記したい。

キリストノ目的ハ世人ノ目的ヲ以テ比スベカラス 真理ノ国ヲ立、  
真理ヲ以人ヲ自由トシ、以人ヲ救フニアリ 吾揚ラレナハ予万人ヲ引  
ケヘシ<sup>54)</sup>

キリストノ目的ハ真ノ神ノ支配ヲ来スニアリテ〔中略〕其〔キリス  
トの〕来ルハ全世界ヲ救ワン為ナレハ、其ノ基礎タルハ神此世ヲ愛サレ  
テ其独り生レシ子ヲ此世ニ下、誰モ之ヲ信スル者ハ亡スシテ救ワルベ  
シトニアリテ、〔中略〕キリストノ国ハ此世ト違ヒ兵力ヲ不用、権謀ヲ  
不用、唯真ト愛トヲ用ヒ、鉄石ノ如キ人心ヲ溶解シテ之ヲシテ神ヲ信  
セシメ、遂ニ之ヲ天国ニ入ラシムルニアリ<sup>55)</sup>

キリストの目的は、真理の国を立て、真理によって人を自由にし、それ  
によって人を救うことであり、この世に真の神の支配を来たらすことであ  
る。キリストは全世界の人々を救うために降誕したのであり、それは、神  
がこの世を愛されて、神の独り子を信じる者が一人も滅びないで救われる  
べきだ、という神のご意思によっておこなわれた。そして、キリストが王  
となる真理の国は、人間の国のような軍備や権謀術数を用いず、ただ真と  
愛によるもので、その国に入る者の堅く閉ざされた心を開いて神を信じさ  
せ、天国に入れさせ給うのである。

新島は、このような、信頼できる揺るぎのない神の愛や救いを真理と考  
え、その真理を得るためにキリストがその生き様や言動を通して示した救  
いの道・救いの教えを真理の証と理解していたのであろう。そして、キリス  
トの復活こそが、そのような神の愛や救い、それを得るための救いの道  
が間違っておらず絶対的に正しいこと、すなわち、真理の証しを証する  
ものである、そう新島は主張するのであろう。

## イエスの復活に関する新島説

既述の通り、新島のキリスト伝は、イエスの復活を真実として語り、そ

れをキリストが真理の証しを証明するものとして、彼のキリスト伝のクライマックスとして描いている。現代日本に生きる我々が通常目にする多くのイエス伝が、イエスの死で幕を閉じ、復活については「復活信仰」、「伝承」などという言葉で追記的に短述したり、あげくのはては、復活について一切触れないイエス伝がロングセラーとなる中<sup>56)</sup>、イエスの復活を確信として述べるキリスト伝は爽快感さえ覚えるものである。

考えてみれば、新島のキリスト伝は、キリスト・イエスの復活がなければ、成り立たないものである。これは単にキリスト伝だけの問題ではなく、キリストの復活がなければ、真理の証しが証明できず、真理そのものが疑いの対象となって、新島において神とキリストに対する信仰さえ崩壊しかねないものとなるのである。

しかし、現実の新島は、もともと異教徒であり、かつ、当時最新の科学的知識を有する理系の人間であるにもかかわらず、キリスト教に回心し、イエスの復活を確信している。

どうして新島はイエスの復活を確信しているのであろうか。彼はイエスの復活についてどのように考えていたのであろうか。

イエスの復活の問題はキリスト論の中で極めて重要なテーマであるが、その一方で「信仰の問題」、「人の心の問題」として扱われ、論文や書籍で議論する対象から外される傾向がある。それは、復活があった、と主張する場合に、常識論に抗してその根拠を論じることが難しい一方で、常識論から復活が無かった、と主張する人は、そもそもキリスト教に対して関心が無く、論争以外でその議論に参加しないであろうし、キリスト者であって、その立場で正面からキリストを論じるのは一般のキリスト者から異端と見なされる恐れがあるからであろう。

しかし、新島は堂々と根拠をあげてキリストの復活を論じているのであって、それは新島のキリスト論では重要な位置を占めている。

そこで以下、彼の議論を少しく検討してゆこう。

新島は、次のように、復活はキリスト教の「最上点」であり、絵に例え

れば、形ある物を描くとき、最後にその影を画いて、絵が完成するようなものである。影がなければ絵は完成しない、と断言する。

蘇生〔復活〕ハ基督教ノ最上点ニシテ、図ニ譬レハ形ノアリ、後影ヲ画クガ如シ<sup>57)</sup>

新島はイエスの復活こそがキリスト教の本髄であり、この復活を欠いてはキリスト教は完成しないと強く主張するのである。

その上で彼は、野蛮な人民は実物を拝して霊を拝しない、キリストの山上の教えを了解するが、キリストが神の子であること、造物主であること、復活したことは全く了解できない。信者でさえも、第一に山上の教に感動するが、キリストの死（と復活）に感動するのは時間がかかる、と歎ずる<sup>58)</sup>。

それでは、新島はいかにしてイエスの復活を確信したのか。それは、彼が聖書をもとに綿密にキリストの復活を研究した結果であると私は結論付ける。

『新島全集』2（宗教編）には、その新島のキリスト復活研究の記録が散見されるが、そのいくつかを次に紹介する。

〔復活したイエスは〕ガリ、ヤノ湖 七人ニ顕ワレ<sup>59)</sup> ガリ、ヤノ山  
五百ノ信徒ニ逢フ<sup>60)</sup> 事 或ル人疑ヘリ

基督ノ蘇生スル事ハ己ニ生時ニ三回程モ門弟ニ語レリシニ<sup>61)</sup>、門弟ノ不信疑ヒテ了解スル能ワス<sup>62)</sup>、然ルニ基督第三日ヲ経、蘇〔生〕サレ二三ノ婦人ニ顕レ<sup>63)</sup>、マクタラノマリヤ<sup>64)</sup>、ペテロ<sup>65)</sup>、エンマウス〔エマオという村で〕、二人ニ顕<sup>66)</sup>、又十一門弟ニ顕ワレ<sup>67)</sup>、又トーマ〔ス〕ノ居ルトキ顕レ<sup>68)</sup> ○十回程モ顕レエンマウスニテ二人ニ丁寧ニ説キ<sup>69)</sup>、又十一門〔弟〕ノ前ニ手足ヲ見セ<sup>70)</sup>、魚ヲ喰ヒ<sup>71)</sup>、聖書ヲ説キ、其苦死ヲ受ケ蘇生スヘキヲ説キタリ<sup>72)</sup>、何ソ愛ノ深キ、耐忍ノ大ナルソ<sup>73)</sup>

このような新島の述べる復活イエスの目撃記録は、その各々の出典を脚注で明らかにしたとおり、彼が新約聖書の四つの福音書に加えて、パウロのコリントの信徒への手紙まで渉獵して集めたものである。また、復活したイエスが「十回程モ顕レ」たことは、その数が直接聖書に述べられていないことから、新島が神学の書籍や授業で学んだものか、あるいは、新島が聖書の記述をもとに自ら計算した結果であると思われる。

そして新島は、イエスの弟子たちが、イエスの生前にイエスをキリスト(主、救い主)であると十分に理解しておらず、イエスの復活後も、なかなかそれを信じず、復活したイエスに出会ったとき初めてそれを知り、それを恐れたことを次のように指摘する。

マリヤノキリストノ心ヲ早く見抜キタル事 ○兼テベタニヤニハ屢御越ニシテ屢教誨モ受タルナラン、故定テ信仰モ進ミ居ルタルナレトモ、門弟ノ如キ常ニ扈従セルニ非ス<sup>74)</sup>

三〇カイザリヤ・ピレピノ道ニテ、基督死ト蘇生トヲ云レテペテロ之ヲ止ム〔之を制止した〕、基督之ヲ斥ケ、人ノ意ニ体セス神ノ意ニ体スト云<sup>75)</sup>

八〇ゲッセメネノ祈ニハ三人ノ門徒眠ニ就キ、基督ト共ニ醒メス<sup>76)</sup>

十〇ペテロノツマツキ〔躓き〕ハ基督先以之ヲ云レシニ、彼〔ペテロ〕モ鶏ノ鳴ク先ニ彼〔基督〕ヲ三回シラズト云レリ<sup>77)</sup>

十二〇蘇生ノ後モ門弟等多ク信セス、二人ノ報モ信セス、十人ノ門弟ニ初メテ顕ワレシトキ之ヲ恐レタリ、トマスノ如キハ見サル内ハ信セサリシ<sup>78)</sup>

〔イエスが〕十字架ニ架ケラレ〔シ〕時ナトニハ門徒輩ノ心中ハ如何ニ迷ヒ居リ〔シ〕ヤ、最早其ノ誘導者ハ殺サレ、ロウバイ千万、手ノ

オキ足ノ踏ム所モスラ知ラ〔ザ〕リシ<sup>79)</sup>

生前のイエスを自分たちの主であり救い主であると理解できなかつた弟子たちのことを思うとき、もしイエスの復活が無かつたならば、キリスト教は世に広まらなかつたはずだ、しかし、実際は、イエスの復活があつたからこそ、弟子たちは、復活のイエスに出会い、最初はそのことをなかなか受け入れなかつたけれども、やがて、間違いなくイエスが復活したと知って驚き、確固たる信仰を得たのである、だからイエスの復活は間違いのない真実であり、だからこそイエスの復活は「基督教ノ最上点」なのだ、新島はそう確信して、次のように断言する。

キリスト復活ヲ以テ真理ヲ証ス

※コリント前書ノ十五章、若〔シ〕キリスト死ヨリ蘇生〔セ〕スハ我等ノ信仰ハ空シト云レシ通、キリスト若シ十字架上ニ死シテ再ヒ生キスハ彼等門徒ハ恐クハ尽失望シ、遂ニハ信仰ヲモ失ヒ、豊太閤死シテ豊太閤ノ天下亡ヒ、徳川氏一〔タ〕ヒ鹿ヲ中原ニ失ヒテ徳川ノ天下弊レシ如ク、キリストノ真理モ恐クハ彼ノ墓中ニ葬レシニ、真理ニ生アリ、真理ノ王ハ死ス能ワス、悪人ノ束圧ヲ受け難ク遂ニ脱テ霊体トナリ賜ヒ、兵丁ヲ以守ラセシニ彼等眠ル内、天使来墓ヲ敗リキリストヲシテ脱去リ、人力以遂ニ束縛シ能ハサラシム<sup>80)</sup>

コリントの信徒への手紙一の15章には「キリストが復活しなかつたのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかつたはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証しをしたことになるからです。死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかつたはずです。そして、キリストが復活しなかつたのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今なお罪の中にあることになります。そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。この世の生活でキリストに望みを

かけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました<sup>81)</sup>」とある。新島はこのパウロの書簡に強く感銘を受けたのであろう、彼は、この言葉通り、キリストがもし復活しなかったのならば、おそらく弟子は甚だ失望し、結局信仰をも失って、キリストの真理もおそらくは彼の墓の中に葬られ、我々が知ることも無かったであろう、と考える。しかし、現実には、キリストの真理は弟子たちによって広められた。そしてさらに、パウロ、アウグスティヌス、ヨハネス・クリュソストモス、フルドリッヒ・ツヴィングリ、ルター、ジョン・ノックス、ジョン・ウェスレー等々のキリスト教の先達たちが、キリストの真理を証しするために陸続と世に現れてきた、そう新島は主張するのである<sup>82)</sup>。

ここで注目すべきは、新島は、使徒言行録の記述に則り<sup>83)</sup>、イエスの生前にはイエスをキリストとしては理解できず、イエスの磔刑の時は、自らの誘導者が殺されて狼狽し不安にさいなまれていた弟子たちが、信仰を進めて、イエスをキリストとして確信してキリストの真理を説き始めた、即ち、弟子たちが本当の意味でキリスト教の布教を始めたのは、復活したイエスから精霊による洗礼を受けるまでエルサレムに止まるように言われ、実際にその出来事が起こったペンテコステ（五旬祭）の日である、と主張する次のような発言を行なっていることである。これも新島における復活の証明、即ち、イエスの復活がなければキリスト教の布教もなかったことの一つであるが、さらにこれは、キリスト教に対する新島の深い理解を窺い知る指摘でもある。

〔復活したキリストは〕凡四十日間数回門徒ニ顕レ天国ノ奥義ヲ話サレテ、門徒ニ此福音ヲ万世ニ伝フベシト命〔ジ〕、カンラン山ヨリ昇天シ賜ヘリ、是トキヨリ門徒深クキリストノ蘇生ヲ信シ、彼等ノ信仰弥々進ミ、皆喜ニ充タサレテエルサレムニ帰レリ、主別ル、前、約束ノ充ツル迄エルサレムニ止マルベシト命シ、其ノ霊ノ下ル迄ハエルサレムニ待タシム<sup>84)</sup>

キリスト聖霊ヲ遣シ、門徒ヲシテ真理ヲ証セシム

ベンテコストノ日ニ聖霊下リ門徒ニ新キ命ヲ与、方言ヲ談スルカヲ賜ハリシペテロ、ヨワンネ、聖霊公然ニ神ノ殿ニ此復活ノ道、救ノ道、真理ノ主ナルキリストヲ説キナハ、猶太人モ牢モ何ニ物モ之ヲ止ル能ハス<sup>85)</sup>

新島は以上のとおり、新約聖書の研究によってキリストの復活を確信した。

しかし、ここで疑問に思うのは、はたして、復活に関する新約聖書の記述に信憑性があるのか、という問題である。

正統主義のキリスト者である新島は新約聖書について、それは神の靈感を受けて書かれたもの<sup>86)</sup>、すなわち、何らかの仕方で神の言葉を担っており、その権威を神から受けているもの捉えており<sup>87)</sup>、既述の通り、「之ヲ読ミ之ヲ信スルモノハ其ノ〔キリストの〕声ヲ聞クヘク、其ノ榮ヲ見ヘク」ことを信じた<sup>88)</sup>。ただし、これまで本文で検討してきたとおり、彼は聖書の記述を通して弟子たちの不安やイエスに対する無理解を読みとっており、その点で彼は聖書を闇雲に信じるのではなく、理性を通してその記述を理解していく立場をとっている。

しかし、実は、正統主義の立場に立たない者やイエスの復活を認めない者も、それぞれの立場で新約聖書の記述の取捨選択を行っているものの、新約聖書の記述を引用して自らの正しさを主張しているわけであるから、結局は新約聖書に真実が含まれていることを前提にしているのである<sup>89)</sup>。

歴史家の立場に立つ私は、新約聖書においてイエスの復活を記述する文書の執筆された年代に注目している。

現在の聖書研究者の検討の結果、4福音書それぞれの書かれた年代はおおむね次の通りであることが認められているという<sup>90)</sup>。

マルコによる福音書 西暦65～70年

マタイによる福音書 西暦75～85（～90）年

ルカによる福音書（および使徒言行録） 西暦75～90年

ヨハネによる福音書 西暦1世紀の終わりまで（～紀元100年）

これらの執筆年代の記述は、西暦という、起点をイエスの生誕年と考えられた年から遡る点で一種の数字のマジックとなり、4福音書がイエスの時代からかけ離れた時代に成立した印象を与える。しかし、イエスが磔刑死し、3日目に復活したといわれる年を紀元30年(イエス33~34歳)とし、その年を仮に「復活暦」元年とすると、それぞれの文書の執筆年代は、次の通りとなる。

マルコによる福音書 「復活暦」35~40年

マタイによる福音書 「復活暦」45~55 (~60) 年

ルカによる福音書 (および使徒言行録) 「復活暦」45~60年

ヨハネによる福音書 「復活暦」~70年

このことは、新島の時代に信じられていた福音書の作者すなわち、ペテロと行動を共にしてペテロの目撃したことを記述したマルコ、元取税人で12使徒の一人のマタイ、パウロが「愛する医者」と呼んだルカ、イエスの愛しておられた弟子であるヨハネ、これらの4人が本当に書いたかどうかという当否を問わなくても、すくなくとも、これら4福音書が、イエスが復活した、といわれる時に生きていた人間が存命している時代に書かれたものであることを明らかに示す。

さらに、新島が復活の証拠としてあげた、復活イエスが「五百ノ信徒ニ逢」ったことの出典であるコリントの信徒への手紙一は西暦54年に書かれている<sup>91)</sup>。西暦54年は、上記の「復活暦」でいえば、なんと24年目の年であり、まだ聖書は、いわゆる旧約聖書しか存在せず、4福音書が成立していなかった頃である。その年にパウロは、コリントの信徒たちに「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。キリストが、聖書〔旧約聖書〕に書いてあるとおりにわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また聖書〔同〕に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれた

ような私にも現れました<sup>92)</sup>」と綴っているのである。

「復活暦」24年とは、復活が24年前に起こったとした年であり、卑近な例でいえば、中年の私が大学時代だった頃に起こった出来事である。それはクラス会で再会した同級生たちと、つい昨日の出来事のように話し合う時代の出来事なのであって、重大な出来事であれば皆が記憶しており、それが真偽かどうかは、当時目撃して「今なお生き残っている」友人に確認すれば容易に分かる、嘘の言えない時代なのである。

周知の通り、このコリントの信徒への手紙を書いたパウロは、もともとキリスト者を迫害していたが、イエスが磔刑に架けられた数年後に光の中でイエスの声を聞き、3日もの間目が見えない体験をして回心した人物である<sup>93)</sup>。このパウロの書簡を読むと、この経験から自分は復活したイエスと出会ったと確信したパウロは、自分と同じような経験をした人々、すなわち、復活イエスと出会った人々を自ら調査し、復活の目撃談を収集したことが分かる。このパウロの文章はイエスの復活の調査レポートなのである。

このパウロのレポートの速報性や4福音書の同時代性、さらに、イエスの磔刑の時は「最早其ノ誘導者ハ殺サレ、ロウバイ千万、手ノオキ足ノ踏ム所モスラ知ラ」ざるほど動揺し、離散してほぼ壊滅していた弟子たちの集団が、その後にあらゆる迫害に耐えてキリストの教えを広め、その中で上記のような文書を著し、その文書が迫害される者たちの命がけの批判や検証にさらされながら今日に至るまで守られてきたことを考えると、弟子たちを変えた巨大な衝撃、イエスの信頼に應えることができなかった弟子たちの弱さを、イエスの真理を証しする強い信仰に変貌させ、迫害による苦や死よりも布教の価値の高さを選択させた強い衝撃があったはずであり、その衝撃とは、イエスが磔刑死した後の弟子たちの、復活イエスとの出会い以外に考えられないであろう。

このような状況証拠から見たとき、新約聖書に記載されているイエスの復活は事実であると考えの方が合理的であり、理性的な判断である。なぜなら、新島の指摘どおり、イエスの復活が無かったとすると、キリスト教の成立と拡大は説明がつかないからある。

## おわりに ～宮川経輝とポーキングホーン～

新島のような、イエスの復活をキリスト教の「最上点」、真髄と考えるキリスト者はどのくらいいるのであろうか。本来は、様々なキリスト者のキリスト論を検討し、その比較を行うべきであるが、ここではその余裕が無い。

そこで、牧界に入った新島の弟子で、職業人に対するキリスト教布教にも努めた人物と、現代のイギリス国教会の司祭で新島のように自然科学とキリスト教の関係に関心の深い人物の二人の議論を取り上げ、若干ではあるが、新島の思想との比較を行いたい。

熊本バンドの一人で、長く大阪教会を牧し、泰西学館や梅花女学校の校長も勤めた宮川経輝は、八幡製鉄所の勤労者のためにキリスト教の入門講座を開き、その講義録を中心にした『基督教十講』を著した<sup>94)</sup>。同書は、キリスト教渡来史に始まり、神観、基督観、人生観から新約聖書の編纂史、原始キリスト教団のありさままで解説し、巻末には20項目にわたる「基督教問答」も収録した、一読すればキリスト教について包括的に理解できるように編纂された良書である。

しかし、実はこの書には、キリストの復活に関する記述が一切無いのである。そして、基督観の章では、新島のようにストイックに新約聖書の記述だけからイエスの生涯を論じるのではなく、聖書以外の様々なイエスの研究書から得たイエスに関する知識を織り交ぜながら、イエスの生涯が生き生きと描かれるのであるが、そして、そこには、新島が語ったイエスの死に関するルソーの評価をそのまま引用するなど、新島のイエス伝の影響も垣間見れるのであるが、イエスが公生活に入ったところで実質的なイエス伝は終了し、イエスの磔刑死や復活の有様は記述されていないのである。巻末の問答にも、だれでも疑問に思うはずの、イエスの復活や奇跡についても説明がない。それでは、同書でイエスはどのような人物として語られているかということ「其智に於て、其愛に於て、其義に於て、其信仰に

於て、迎も他の聖賢の及ぶ所ではない」、その意味で「円満完全に神自体を顕した人物」として描かれているのであり<sup>95)</sup>、「イエス基督の御人格は縦から見ても横から見ても一点の汚がない。恰も太陽の光の如く正義の光を映射してある<sup>96)</sup>」ゆえに神を顕しているのだ、と説かれているのである。そして、新島が語るように、イエスが復活したからこそキリスト教が布教したのである、という議論については、まったくそれを認めず、その経緯は次のように述べられている。

基督が御昇天なされたる当時基督信者は十二の弟子、七十子、それに婦人及びイエスの兄弟をも加へて百二十人であつたと使徒行伝記者は録して居る。此百二十人は杖とも柱とも頼んで居った主イエスにお別れしたので、非常に失望して到底成すあるに足らじと思つた。併しよく考えて見ると基督が建設せんとされたのは地上の王国でなく、靈的王国であつた事を悟つて、前述の百二十人が一団となつて心を協せて常に祈祷を努めた。〔中略、彼らは〕高潔なる思ひに満たされ、同輩を嫉むと云ふ様な邪心は消滅して純良なる思念に満たされ、至誠以て主の使命を果さんと欲するに至つた、茲に於て熱烈なる伝道の精神が勃起したのである<sup>97)</sup>。

これを読むと、イエスの復活は否定された上で、弟子たちがイエスの遺志を受け継いでキリスト教の布教に努めるようになったと理解される。非常に受け入れられやすい説明ではあるが、弟子たちの人間であるがゆえの弱さが語られず、キリスト教が人間が求める宗教に変わってしまったように感じられる。

一方、もともと理論物理学者で英国学士院会員であり、ケンブリッジ大学クイーンズカレッジの総長も務めた英国国教会司祭のジョン・ポーキングホーンは、新島のように、「キリスト教の中核に、キリストの復活という途方もない奇跡がある<sup>98)</sup>」と断言する。話がイエスの磔刑死で終わったのなら、彼について我々はなにも知らなかったであろう。彼は「しかし、実

際に我々は、ローマ帝国から遠く離れた地方であるイスラエルをさまよっていた大工の息子について多くのことを知ることができる。イエス自身は一冊の本も書かなかった。悲惨な最期を迎えたにもかかわらず、死後何かが起こったためにすべてが変わったのである。驚き、打ちひしがれていた弟子たちを何物かが決定的に変えたのである<sup>99)</sup>」と指摘した上で、新約聖書の記述からイエスの復活の証拠をいくつか示し、イエスが復活したのは間違いないと論じるのである。

しかし、常識的に言って、人間の復活などありえないだろう、という反論については、ポーキングホーンは、「[20世紀に入り、光は波であるとともに粒子であることが分かったとき]誰も信じたくは無かったが、事実によって受け入れざるを得なかった。[略]物理的世界を詳しく調べて、完全な理解に到達したと思っても、なおその先に私たちを驚かすに足る新しい事実が発見される可能性がある<sup>100)</sup>」、「我々の住む豊かで複雑な世界を本当に理解しようとするなら、科学と宗教の両方の助けが必要である。科学はそれ自体、限界があるものだし、ある意味で世界を観る視点としては貧弱なものである<sup>101)</sup>」と、その豊かな自然科学の知見に基づき、実例を挙げながら反論するのである。

新島もまた、復活などの奇跡を否定する人を「此等ノ事ヲ云人ノ心ヲタ、ケハ、或ハ傲慢ナルカ、或ハ無知ナルカ、或ハ不信ナルカ、或〔ハ〕姦悪ニ沈メルカ、何分物質世界ヲ見テ、楽〔コノミ〕テ無形世界ノ別天地アルヲ知ラス、味ハサルナリ<sup>102)</sup>」と批判し、「道理ノミニ流ルレハ、道理ノ解シ得シ〔ママ〕得サル往キ留迄行キ、其ノ先ハ暗黒ニシテ見ヘス<sup>103)</sup>」として道理すなわち、科学の限界を指摘する。さらに「宗教上ニ於テ矢張道理ト信仰ノ関係ハ密着ナルモノニシテ、決シテ齟齬スベキモノニアラス<sup>104)</sup>」、宗教上において、科学と宗教、理性と信仰は決して矛盾するものではなく、キリストこそ、科学者が科学的な見方からは十分に了解できない神を明快に人間に理解させるものだ、だから、キリスト教の神は科学の及ばないところにおられる神であって、人間がつくった神仏や偶像などの科学と矛盾するものとは本質的に異なるのだ、として次のように語る。

基督ノ説キ賜ヒシ神ハ、乃チ理学家ノ道理上ヨリ遡リ、充分ニ了知シ得サルノ神ヲ一層了明ニ人間ニ告ケ知ラシタルモノナリ。故ニ基督教ノ神ハ道理上ノ力ノ及ハ〔サ〕ル神ニシテ、道理ニ齟齬スル人間ノ細工ナル神仏偶像ノ類ニアラス<sup>105)</sup>

新島のキリスト論、特にキリストの復活論は、英国国教会司祭のポーキングホーンの論理と驚くほど似ている。その意味で、新島のそれは、欧米のキリスト論の系譜の中にあると私は考える。一方、キリストの復活を欠く宮川のキリスト論は、日本人に受け入れやすいものであるが、しかし、そのキリスト観を煎じ詰めると、キリストが本質的には釈迦や孔子とあまり変わらない偉人という理解に行き着く。『基督教十講』の巻末の問答に、日本には神道や儒教、仏教があるのに、どうしてわざわざキリスト教を信仰しなければならないのか<sup>106)</sup>、という主旨の質問が載せられているとおり、そのキリスト論を聞くものは、キリストの生き方に感心するけれども、どうしてもキリストでなければならない、という強い信仰をもつまでには、突き動かされないのである。私にはそこに、日本のキリスト教の課題が垣間見える気がするのである。

## 注

- 1) アリスター・E. マクグラス著／芳賀力訳『神学のよるこび』142頁 キリスト新聞社 2005年。
- 2) たとえば、『新島襄全集』2（宗教編）42頁 同朋舎出版 1983年。
- 3) たとえば、前掲書 97頁。
- 4) たとえば、前掲書108頁。
- 5) たとえば、前掲書156頁。
- 6) たとえば、『現代語で読む新島襄』（同編集委員会編）54頁 丸善 2000年。
- 7) たとえば、前掲書同頁。
- 8) 前掲『新島全集』2 152頁。
- 9) S. W. ホーキング著／林 一訳『ホーキング、宇宙を語る』223～225頁 早川書房 1989年。

- 10) 前掲『新島全集』2 148頁。
- 11) 下村孝太郎『我が宗教観』76頁 北文館 昭和8年。
- 12) 前掲書94頁。
- 13) 前掲『新島全集』2 152頁。
- 14) 前掲書同頁。
- 15) 前掲書同頁。
- 16) 前掲書152～153頁。
- 17) 前掲書324～327頁。
- 18) 『新約聖書 スタディ版』（新共同訳）206～207頁 日本聖書協会 2004年 なお、本文で以下に引用する聖句の出典も、新島の言葉の現代文拙訳を除いて同じ。
- 19) ルカによる福音書2章41～49節。
- 20) ヨハネによる福音書1章29節。
- 21) ヨハネによる福音書1章39節。
- 22) たとえば、マタイによる福音書第4章19節。
- 23) マタイによる福音書（8.5-13）には、百人隊長の僕のことは記述されているが、その息子のことには記述されていない。なお、百人隊長とは、命令によって戦いで死ぬ覚悟のできている百人の平氏を指揮、訓練したローマ兵の隊長であり、百人隊長は25年軍隊に使えることになっていた（前掲『新約聖書 スタディ版』13頁）。
- 24) マルコによる福音書7章24～30節。
- 25) ティベリアス湖、すなわちガリラヤ湖か？
- 26) フェリサイ派とは、忠実に律法を遵守することを強調したユダヤ上等階級の一派。その名称は、分離する者あるいは清い者を意味するヘブライ語に由来し、民衆から尊敬された（前掲『新約聖書 スタディ版』130頁）。
- 27) ヨハネによる福音書4章1～4節。
- 28) ヨハネによる福音書6章15節。
- 29) ヨハネによる福音書7章1～9節。
- 30) たとえばルカによる福音書11章42節。
- 31) たとえばマタイによる福音書19章24節。ただし、新共同訳では「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」と訳されている。
- 32) ルカによる福音書13章32節。

- 33) 律法学者とファリサイ派の人々の誤りか。マタイによる福音書(23.27-28.)では、イエスは彼らを「白く塗った墓」、すなわち「外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている」と述べられている。なお、大祭司を「白く塗った壁」と呼んだのはパウロ(使徒言行録、23.3)。
- 34) マタイによる福音書8章20節。
- 35) ヨハネによる福音書18章4-5節。ただし、聖書のこの箇所では、イエスの「誰を捜しているのか」という問いに対して兵士や下役たちが「ナザレのイエスだ」と答えると、イエスは「わたしである」と言われたことが記されている。
- 36) ヨハネによる福音書18章36~37節。
- 37) ヨハネによる福音書18章36節には、イエスはピラトに対して「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう」とあり、次の37節には、既述の通り「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く」とある。
- 38) マタイによる福音書22章16節、マルコによる福音書12章14節。ルカによる福音書20章21節。
- 39) 福音書における真理の単語の数は、日本聖書協会の聖書本文検索 [http://www.bible.or.jp/vers\\_search/vers\\_search.cgi](http://www.bible.or.jp/vers_search/vers_search.cgi) による(2009/9/23調査)。
- 40) マルティン・ルター／石原 訳「新約聖書への助言」『新訳 キリスト者の自由・聖書への助言』64~66頁(岩波文庫 1955)。本書でルターは「もしキリストの行いあるいは説教の、何れか一つを欠かなければならぬとしたら、私は彼の説教よりはむしろ行いを欠く方が、まだしも忍びうるであろう。行いは私にとって何の助けにも役立たないが、彼の言はキリスト自から語りたもうたように、生命をあたえるからである。実際ヨハネはキリストの行いについて極めて僅かしか記していないが、彼の説教はこれをはなはだ豊富に書き列ねている。これに反して他の三福音書記者は、彼の行いについて多く語っているが、その言について伝えるところが乏しい。故にヨハネの福音書は独自の優れた真実の主要な福音書であって、他の三者よりも遙かにまさって選まれ、より高く評価されるべきである」と述べる。なお、新島はルターの「新約聖書 *Das Neue Testament nach Dr. Martin Luthers Uebersetzung mit*

*Einleitungen und erklärenden Anmerkungen* (1872年、ベルリン刊。書誌IDBB005648 97)を蔵書しており、新島がおそらくドイツ (のWiesbaden?)でドイツ語の勉強がてら、彼がこの序文を読んだことは容易に推測できる。

- 41) たとえばマタイによる福音書16章21節、17章22節、20章17節。
- 42) ヨハネによる福音書16章16-22節。
- 43) ヨハネによる福音書12章32節。
- 44) ヨハネによる福音書16章33節。
- 45) 『論語』「子罕第九」「鳳鳥不至、河不出図、吾已矣夫」(前掲『新島全集』2 654頁参照)。
- 46) この和歌は秀吉が聚楽第完成のときに詠んだもの。新島はこれを正確に記述している。なお、世間に有名な「露と落ち露ときえぬる我身かな、浪華のことは夢の又夢」は、その後に秀吉がこれを添削したもの。徳富蘇峰『近世日本国民史』(普及版)第10巻「豊臣氏時代庚編桃山時代概観」97頁(民友社 昭和10年参照)。
- 47) マタイによる福音書27章62~66節。
- 48) ヨハネによる福音書20章24~29節。
- 49) 本文中で紹介したヨハネによる福音書18章37節のほか、ヨハネの手紙二2~3節には「いつもわたしたちの内にある真理によることで、真理は永遠にわたしたちと共にあります」とある。
- 50) A. S. Hornby, E. V. Gatenby, H. Wakefield *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (新英英大辞典) 開拓社 1978年
- 51) 前掲『新約聖書 スタディ版』「キーワード」の項14頁。
- 52) ラルネデ述、大宮季貞記『約翰伝講解』529頁 東京警醒社 明治38年。
- 53) [キリストの目的] 前掲『新島全集』2 328~335頁。
- 54) 前掲書328頁。
- 55) 前掲書331頁。
- 56) たとえば、岩波新書の『イエスとその時代』(荒井献著)。本書は1974年に刊行され、2007年には28版を数える。
- 57) 前掲『新島全集』2 3頁。
- 58) 前掲書5頁。原文は「野蛮人民 実物ヲ拝 霊ヲ拝セス 基督ノ山上〔ノ〕教ヲ了解スルモ、基督神子ナル事、造物者ナル事、蘇生セシ事ハ更ニ了解シ得ス 信者モ

第一ニ山上ノ教ニ感シ基督ノ死ニ感スル遅シ」。

- 59) たとえば、ヨハネによる福音書21章。
- 60) コリントの信徒への手紙一15章 6 節。
- 61) たとえば、マタイによる福音書16章21節、同17章22節、同20章19節。
- 62) たとえば、マタイによる福音書16章22節。
- 63) たとえば、マタイによる福音書28章 9 節。
- 64) 注63参照。
- 65) たとえば、ヨハネによる福音書21章15～19節。
- 66) たとえば、ルカによる福音書24章13～31節。
- 67) たとえば、マタイによる福音書28章16～17節。
- 68) ヨハネによる福音書20章26～29節。
- 69) 注66参照。
- 70) たとえば、ルカによる福音書24章39節。
- 71) たとえば、ルカによる福音書24章42～43節。
- 72) ルカによる福音書24章44～46節。
- 73) 前掲『新島襄全集』2 4 頁。
- 74) 前掲書29頁。
- 75) 前掲書同頁。
- 76) 前掲書30頁。
- 77) 前掲書同頁。
- 78) 前掲書同頁。
- 79) 前掲書196頁。
- 80) 前掲書116頁。
- 81) コリントの信徒への手紙一15章12～20節。
- 82) 前掲『新島襄全集』2 116頁。
- 83) 使徒言行録 1～2 章。
- 84) 前掲『新島襄全集』2 116頁。
- 85) 掲書同頁。
- 86) 前掲『現代語で読む新島襄』108頁。
- 87) 『フランス信仰告白』（1559年）、前掲『神学のよろこび』24頁。

- 88) 注15参照。
- 89) たとえば、高尾利数氏は、「〔イエスが〕復活して天に昇ったなどといわれることは、すべてあの時代に限定される神話的・宗教的観念に基づいたものである。それらを現実だと思い込むことは、昔でも今でも迷信にほかならない」と述べる一方で、「少しでも批判的に福音書を読んでみれば、イエスがわれわれとは異質の何か超自然的な存在であったなどと思うことは、間違いであることが明らかであろう」と述べる。同氏「イエスの原像」『キリスト教の本』（＜上＞、救世主イエスと聖書の謎を解く）128頁 学習研究社1996年。
- 90) 新約聖書の執筆年代に関する出典は、『カラー版聖書大辞典』新教出版社 1991年。
- 91) 脚注90参照。なお、57年説もある。
- 92) コリントの信徒への手紙一15章3～8節。
- 93) 使徒言行録9章。
- 94) 宮川経輝『基督教十講』北文館 大正4年。
- 95) 前掲書68頁。なお、一部の漢字を現代表記に改めた。以下同書の引用は同じ。
- 96) 前掲書100頁。
- 97) 前掲書156頁。
- 98) ジョン・ポーキングホーン／小野寺一清『科学者は神を信じられるか』（ブルーバックス B-1318）124頁 講談社 2001年。
- 99) 前掲書130頁。
- 100) 前掲書22～23頁。
- 101) 前掲書28頁。
- 102) 前掲『新島全集』2 184～185頁。
- 103) 前掲書147頁。
- 104) 前掲書同頁。
- 105) 前掲書148頁。
- 106) 前掲『基督教十講』『基督教問答追加』 37～40頁。

## 参考文献

アリストアー・E. マクグラス著／芳賀力訳『神学のよろこび』キリスト新聞社 2005年

- 『新島襄全集』2（宗教編） 同朋舎出版 1983年
- 『現代語で読む新島襄』（同編集委員会編） 丸善 2000年
- S. W. ホーキング著／林 一訳『ホーキング、宇宙を語る』 早川書房 1989年
- 下村孝太郎『我が宗教観』 北文館 昭和8年
- 『新約聖書 スタディ版』（新共同訳） 日本聖書協会 2004年
- マルティン・ルター／石原 訳『新訳 キリスト者の自由・聖書への助言』（岩波文庫 青 808-1） 岩波書店 1955年
- 徳富蘇峰『近世日本国民史』（普及版）第10巻 民友社 昭和10年
- A. S. Hornby, E. V. Gatenby, H. Wakefield *Idiomatic and Syntactic English Dictionary*（新英英大辞典） 開拓社 1978年
- ラルネデ〔ラーネッド〕 述／大宮季貞記『約翰伝講解』 東京警醒社 明治38年
- 荒井献著『イエスとその時代』（岩波新書 C 158） 岩波書店 1974
- 『カラー版聖書大辞典』 新教出版社 1991年
- 宮川経輝『基督教十講』 北文館 大正4年
- ジョン・ポーキングホーン／小野寺一清『科学者は神を信じられるか』（ブルーバックス B-1318） 講談社 2001年